

赤字国債を解消しよう ―財政単元―

神奈川県中学校教諭

1 はじめに

現在の学習指導要領は「経済」を「政治」の前にもってきている。しかし、改定された教科書を見ると従来どおり、「政治」から学習するといったものがみられた。それなりの理由があつてのことだと思ふが、私にとっては従来どおりの方がありがたい気がした。

「経済」、「政治」のどちらを先に学習するにしても、「財政」をどのように扱うかは、私にとって大きな課題の一つであつた。教科書には単独で「財政」の単元はなく、福祉や金融政策とセットになっていることが多いようである。

この単元をどのように学習していくかという、財政に関する学習もするが、社会保障や福祉の学習で「車いす体験」や「アイマスク体験」「消費者教育」が盛り込まれていたりする。また、公害や環境問題の調べ学習を行うこともあるだろう。しかし、授業にこのような体験的な学習や調べ学習、悪徳商法の劇などを取り入れると、「財政」の部分はとってつけたような感じで、けっして「財政」が単元の中心になっているようには思えなくなってくる。

「財政」は地方自治の学習でも登場する。歳入や歳出を理解するためにはここで財政の学習をするのも一つの方法だ。しかし、身近なものとして、「中学生に年間いくらかかっているか？」ということについては子どもの関心も向くか、「国の財政は82兆円」という段階で、その数字は子どもの現実から離れたものになってしまう。「80兆」というものが創造もつかないものであるからだ。このような状況では子どもの切実感が生まれず、入試のためにひたすら覚える学習となってしまう。

2 財政を単元の中心においた学習づくり

財政をどのように学習すればよいか。いくつかの教科書を見比べてみたが、「財政」に関する学習は複数の箇所で見られる。教科書どお

りに進めていくとすれば、「財政」を一つの単元として学習することはむずかしいと感じる。財政を中心におき、一つの単元とした学習計画を考えるにはどうしたらよいか。そこで、単元構成をつくるにあたって、自分自身の考えを整理するために「教えたい語」、「使いたい資料」を列挙してみた。そしてこれをもとにどのように授業を組み立てていくかを考えてみた。

4 納税者として国の経済を考えよう

社会のワザンシヨウ 学校にはいくらかかっている?

ピアノ

校舎

①公立学校のさまざまな設備

小学生	中学生	高校生(全日制)
853,000円	915,000円	920,000円

②公立学校の授業・生徒1人あたりの年間職員報酬・田舎の資料 平成13年度

図・この費用はだれが負担しているのでしょうか。

① 私たちの生活と財政

私たちの生活と財政

私たちがものを買ったり外食したりするとき、ものやサービスを提供しているのは民間の企業です。しかし私たちの生活を見わたすと、政府(国や地方公共団体など)によって提供されているものやサービスもたくさんあります。道路・ごみの収集・警察・消防、上の図のような公立の学校などは代表的な例です。政府が税金などの収入によって、国民にこうしたものやサービスを提供するはたらきを財政とよびます。

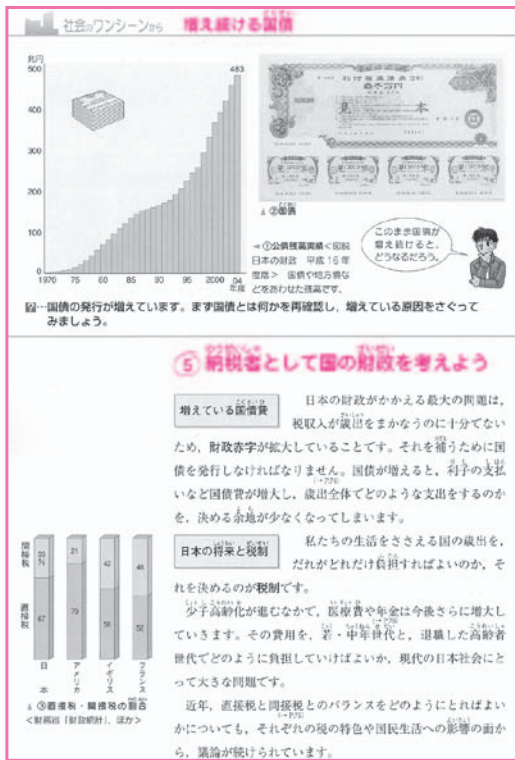
帝国書院『中学生の公民(初訂版)』p.72 *平成18年度用

身近な材料 = 教育費・中学生にいくらかかっているか? 学校の備品はいくら? 学校の電気代はいくら? 一人あたりの警察・消防費、ごみ処理費用、医療費の公費負担 地方自治 所得税-消費税 間接税-直接税 国税-地方税 赤字国債 国債発行高のグラフ 納税の義務 社会保障 生活保護 社会保険 自己責任公共事業

郵政民営化、小さな政府、税制改革、談合、ダム建設、高速道路建設 天下り

●時事問題を単元を中心におくのはどうか？

小泉首相が郵政民営化を進めるのはなぜか、小泉首相が言う「小さな政府」とは何か。このことも十分に教材になりえる気がするが、党の政策について授業で取り上げることに疑問があるし、第一、生徒にとってはむずかしい（私でもわからないことが多い）。税金の無駄遣いといわれる道路工事やダム建設についてはその問題を追及するのは面白いかもしれないが、これも中学生にはむずかしい。表面的な学習に終わってしまいそうである。



帝国書院『中学生の公民(初訂版)』p.82 *平成18年度用

●国の歳入歳出を単元を中心におくのはどうか？

財政の学習で、よく使うのが政府の歳入と歳出の円グラフだ。これをもとに「税金にはどんなものがあるか?」、「歳出の中で多いものはどれか?」というスタンスで授業を行うと、知識注入型の授業に終始してしまいそうである。

●福祉から入っていくのはどうか？

福祉から入ると、結局、財政は2次的なものとして扱うことになってしまいそうである。前述の通り、「車いす体験」をすると、単元を中心は財政

でなくなってしまう。アメリカ型の社会保障がよいか、北欧型の社会保障がよいかというテーマで討論をするというのも経験したことがあったが、生徒は感覚的に「よい」「わるい」という意見しかもつことができず、学習を深めることができなかった経験がある。

3 単元計画とすすめ方

今回の学習のおもな流れ

第1時

私たちにはいくらお金がかかっているか？

- 神奈川県 の歳入・歳出
- 地方公共団体のしごと

第2時

私たちが払っている税金にはどのようなものがあるだろうか？

- 国の歳入
- 税金の種類、累進課税制度

第3時

歳出で一番多い社会保障費、公共事業費とはどのようなものだろうか？

- 日本の社会保障制度
- 社会資本の充実

第4時

国の借金を減らすにはどのようにしたらよいか？
「国の借金を一万円札にして積み上げると富士山の1400倍の高さ」

増税推進派と増税反対派にわけて、相手を説得するための資料をさがす

班で発表し、クラスとしての意見を定める

*この単元は5～6時間扱い。学習のための資料は「わたしたちの生活と税（神奈川県租税教育推進協議会）」を使用する。

今回の学習では単元を中心にすえたのは「莫大な国債」である。「日本の借金は、1万円札を束にすると、富士山の1400倍！」。これをどう解決したらよいか、子どもたちに考えさせることにした。このことは驚きもあるが、将来を担う中学生にとっては切実な問題となるはずだ。しかし、いきなりこれを提示すると生徒は困惑する。驚きだけで学習が深まらない。そこで、身近な題材から授業を進め、一通りの知識をえたところで本題に入ることにした。

4 財政の授業の実際

第1時から第3時まではいわゆる知識注入型のレクチャー中心の授業である。この部分も調べ学習でもよいと思うが、入試のことが心配であるのが本音である。

第4時に、テーマである「国の赤字をなくすためにはどうしたらよいか」というテーマを与える。今回は5～6人の班を6つつくり、1～3班は「増税賛成の立場」で、4～6班は「増税反対の立場」で相手を説得させるための資料をさがすようにする。班割りは抽選で行う。したがって、第1～3時までの授業を聞いて増税には反対であっても、推進をとらえなければならぬこともある。ここも一つのポイントである。

話し合ってみよう ～消費税を考える



次の討論は、消費税導入直後の中学生の話し合いの論点です。少しおかしいなどと思う点や、そう思うというような点を出し合い、これを参考に友だちと消費税をふくめた税金について話し合ってみましょう。

《消費税導入賛成がわのおもな論点》

消費税の基礎となる所得について、だれにどれだけの所得があるのかを正確に知るのはいやうい容易ではありません。これに対して消費はだいたい所得に比例してなされるので、消費税は税制のしくみとして公平です。

《消費税導入反対がわのおもな論点》

新しい税を導入するのは、高齢者など社会的弱者の負担がふえるのでおかしいです。所得税のほうがお金もちから多くとるので公平で、消費税のように所得の少ない人にも課税するのは不公平です。

帝国書院『中学生の公民（最新版）』p.92

班のテーマを決めるにあたって、ヒントにすることは歳入が多い部分、歳出が多い部分に注目させる。そうすると必然的にテーマが確定する。他のクラスでは同様のテーマとなった班があったが、それも可とした。

3年A組のテーマ

- 1班 増税推進派：「所得税を上げよう」
- 2班 増税推進派：「消費税を10%に」
- 3班 増税推進派：
「酒税・たばこ税を大幅増税」
- 4班 増税反対派：
「自己責任！アメリカ型福祉」

5班 増税反対派：

「ムダをなくした小さな政府」

6班 増税反対派：「公共事業の見直しを！」

1班は、所得税が歳入に占める割合は16%で一番多いことから「所得税を上げよう」ということになった。この班が目にしたのは累進課税制度である。900万円以下の場合には現在と同じ税率で、900万円を超す所得に対しての税率を大幅に上げるといったものだった。諸外国のデータをあげ、高所得者にもっと大きな課税を求めるものだったが、「1800万円を超す所得がある人は日本にどれくらいいるのか？」という質問を受け主張を続けられ

なくなりました。

2班は歳入の3番目に多い消費税に注目した。消費税は生徒にとっていちばん身近な税であるだけにどの班からも反対された。

「消費税を倍にすれば歳入も倍になる」

「いや消費税を倍にしたら、みんなは物を買わなくなる」

そこで2班はインターネットで調べた「日本の借金時計（経済シンクタンクHARVEY ROAD JAPAN）」のデータを公表。刻一刻と増えていく国の借金、結局これが決め手となってみんなを納得させることができた。

増税推進派



「消費税を10%にしよう！」は増税推進派からも激しく反対されたが、日本の消費税は先進国の中ではいちばん安いと反論。また、日本の借金時計のデータから「ぼくたちの家庭の負担額は1600万円、国の借金は760兆円を超えていて、1秒間に100万円ふえているんだ」と説得した。

3班は当初、「ぜいたく品に大きな課税を」と言っていたが「何がぜいたく品かわからない」ということで「たばこ・酒税の大幅増税」を訴えた。たばこや酒は中学生にとって関わりのないことなので支持された。しかし、「禁煙が進む中でどれだけの人がたばこを吸うのか?」、「歳入に占める割合は少ない」と2班に指摘された。

4班は歳出でもっとも多くを占める社会保障関係費に注目し、これを減らすことを主張した。アメリカ型の自己責任を主張したが、「これから老人が増えるのに無理がある」「生活保護を削る

のはひどい」「犯罪が増える」という反論がでた。

増税反対派



短期間で新聞やニュース番組から情報を得て「小さな政府」を主張した。

5班は小泉首相の政策を調べていた。必要かどうかわからない機関について発表し、賛同を得た。郵政事業民営化も話題になった。公務員を削減することも賛同を得たかに思われたが、「サービスが低下する」「給料を減らすと先生が真面目にやってくれない」「50人学級はいやだ」「高校に入れなくなる」という意見で、「小さな政府」は「消費税10%」に押し切られてしまった。

6班は5班と似ている部分があったが、話題は高速道路建設が中心であった。この班も新聞やニュース番組をよく見ていた。この班の発表で、生徒は「談合」ということを学習することができた。

5 財政の学習をおえて

生徒の発表や討論を聞いていると、調べたことは不十分だと思われることもあるが、中学生の目線で物を見て考えていることがよくわかる。このクラスで「消費税10%」が採用されたことについても、消費税は身近で、国の借金は切実なものというところに決着するかもしれない。

生徒の発想は実に面白いと感じる。教師が黒板を使って一生懸命説明しなくてもいろいろなことを学習してくれる。生徒が自ら考えていくことが知識の定着にも関係すると思われる。